

# III

## 学部・研究科等による 取組み

---

### III-4 東京キャンパス

---

東京キャンパス学年暦 ..... 219

人文学部 ..... 221

#### 学部レビュー

- 1 学生の受け入れ
- 2 教育課程
- 3 教育組織
- 4 学生支援
- 5 就業支援
- 6 研究活動
- 7 社会貢献
- 8 図書館〔東京〕
- 9 自己点検・評価
- 10 その他

2014(平成26)年度 東京キャンパス〔人文学部〕 学年暦

第1部学部・研究科等による取組み―4東京キャンパス

4 月			5 月			6 月		
1	火	①	1	木	④	1	日	
2	水	②	2	金	⑤	2	月	⑧
3	木	③	3	土	⑥	3	火	⑨
4	金	④	4	日	⑦	4	水	⑩
5	土	⑤	5	月	⑧	5	木	⑪
6	日	⑥	6	火	⑨	6	金	⑫
7	月	⑦	7	水	⑩	7	土	昭和の日(4/29)の振替休日 (体育祭)
8	火	⑧	8	木	⑪	8	日	(体育祭(予備日))
9	水	⑨	9	金	⑫	9	月	⑬
10	木	⑩	10	土	⑬	10	火	⑭
11	金	⑪	11	日	⑭	11	水	⑮
12	土	⑫	12	月	⑮	12	木	⑯ 教職員健康診断
13	日	⑬	13	火	⑯	13	金	⑰
14	月	⑭	14	水	⑰	14	土	⑱ 教職員特別研修会
15	火	⑮	15	木	⑱	15	日	
16	水	⑯	16	金	⑳	16	月	㉑
17	木	㉑	17	土	㉒	17	火	㉓
18	金	㉒	18	日	㉓	18	水	㉔
19	土	㉓	19	月	㉔	19	木	憲法記念日(5/3)の振替休日
20	日	㉔	20	火	㉕	20	金	㉕
21	月	㉕	21	水	㉖	21	土	㉖
22	火	㉖	22	木	㉗	22	日	第1回オープンキャンパス
23	水	㉗	23	金	㉘	23	月	㉗
24	木	㉘	24	土	㉙	24	火	㉘
25	金	㉙	25	日	㉚	25	水	㉙
26	土	㉚	26	月	㉚	26	木	㉚
27	日	㉚	27	火	㉛	27	金	㉛
28	月	㉛	28	水	㉜	28	土	㉜
29	火	㉜	29	木	㉝	29	日	
30	水	㉝	30	金	㉞	30	月	㉝
			31	土	㉞			
7 月			8 月			9 月		
1	火	㉞	1	金	㉞	1	月	後学期履修登録(WE)開始
2	水	㉟	2	土	㉟	2	火	
3	木	㊱	3	日	㊱	3	水	
4	金	㊲	4	月	㊲	4	木	
5	土	㊳	5	火	㊳	5	金	
6	日	㊴	6	水	㊴	6	土	後学期履修登録(WE)締切
7	月	㊵	7	木	㊵	7	日	AO入試1期
8	火	㊶	8	金	㊶	8	月	
9	水	㊷	9	土	㊷	9	火	
10	木	㊸	10	日	㊸	10	水	
11	金	㊹	11	月	㊹	11	木	
12	土	㊺	12	火	㊺	12	金	
13	日	㊻	13	水	㊻	13	土	進学相談会(AO1期)
14	月	㊼	14	木	㊼	14	日	
15	火	㊽	15	金	㊽	15	月	敬老の日
16	水	㊾	16	土	㊾	16	火	追試験
17	木	㊿	17	日	㊿	17	水	追試験
18	金	㊱	18	月	㊱	18	木	追試験
19	土	㊲	19	火	㊲	19	金	
20	日	㊳	20	水	㊳	20	土	① 後学期:講義開始進学相談会(AO1期)
21	月	㊴	21	木	㊴	21	日	
22	火	㊵	22	金	㊵	22	月	
23	水	㊶	23	土	㊶	23	火	① 秋分の日(通常授業)
24	木	㊷	24	日	㊷	24	水	①
25	金	㊸	25	月	㊸	25	木	①
26	土	㊹	26	火	㊹	26	金	①
27	日	㊺	27	水	㊺	27	土	②
28	月	㊻	28	木	㊻	28	日	
29	火	㊼	29	金	㊼	29	月	②
30	水	㊽	30	土	㊽	30	火	②
31	木	㊾	31	日	㊾			

10 月			11 月			12 月		
1	水	②	1	土	体育の日(10/13)の振替休日	1	月	⑪
2	木	②	2	日		2	火	⑩
3	金	②	3	月	⑦	3	水	⑩
4	土	③	4	火	⑥	4	木	⑩
5	日		5	水	⑥	5	金	⑩
6	月	③	6	木	⑥	6	土	⑩
7	火	③	7	金	⑦	7	日	
8	水	③	8	土	⑦	8	月	⑫
9	木	③	9	日	AO入試Ⅲ期・指定校推薦公募推薦・学園傘下校(淑徳)	9	火	⑪
10	金	③	10	月	⑧	10	水	⑪
11	土	④	11	火	⑦	11	木	⑫
12	日	AO入試Ⅱ期	12	水	⑦	12	金	⑪
13	月	④	13	木	⑧	13	土	⑪
14	火	④	14	金	⑧	14	日	AO入試Ⅳ期学園傘下校(淑徳)
15	水	④	15	土	⑧	15	月	⑬
16	木	④	16	日		16	火	⑫
17	金	④	17	月	⑨	17	水	⑫
18	土	⑤	18	火	⑧	18	木	⑬
19	日	進学相談会(AOⅡ期)	19	水	⑧	19	金	⑫
20	月	⑤	20	木	⑨	20	土	⑫
21	火	⑤	21	金		21	日	
22	水	⑤	22	土	淑徳祭準備日	22	月	⑭
23	木	⑤	23	日	淑徳祭・第5回オープンキャンパス(AOⅢ期進学相談会)	23	火	年内講義終了
24	金	⑤	24	月	⑩	24	水	天皇誕生日
25	土	⑥	25	火	⑨	25	木	文化の日(11/3)の振替休日事務局休暇開始
26	日		26	水	⑨	26	金	
27	月	⑥	27	木	⑩	27	土	
28	火	海の日(7/21)の振替休日	28	金	⑨	28	日	
29	水	秋分の日(9/23)の振替休日	29	土	⑨	29	月	
30	木	⑥	30	日		30	火	
31	金	⑥	31	日		31	水	
1 月			2 月			3 月		
1	木	元 旦	1	日		1	日	
2	金		2	月		2	月	
3	土		3	火	一般入試A	3	火	
4	日		4	水	一般入試A	4	水	
5	月		5	木		5	木	
6	火	⑬	6	金		6	金	
7	水	⑬	7	土		7	土	
8	木	⑭	8	日		8	日	AO入試Ⅴ期 一般入試C
9	金	⑬	9	月		9	月	勤労感謝の日振替休日(11/24)の振替休日
10	土	⑬	10	火		10	火	
11	日		11	水	建国記念の日	11	水	
12	月	成人の日	12	木		12	木	
13	火	⑭	13	金		13	金	
14	水	⑭	14	土		14	土	
15	木	⑭	15	日		15	日	
16	金	⑭	16	月		16	月	
17	土	⑭	17	火	後期成績発表表(WEB)	17	火	
18	日		18	水		18	水	
19	月	⑮	19	木	追試験	19	木	
20	火	⑮	20	金	追試験	20	金	
21	水	⑮	21	土	追試験	21	土	春分の日
22	木	⑯	22	日	一般入試B	22	日	第7回オープンキャンパス
23	金	⑮	23	月		23	月	
24	土	⑮	24	火		24	火	
25	日		25	水		25	水	2年生オリエンテーション
26	月	⑯	26	木		26	木	
27	火	⑯	27	金		27	金	全教員会
28	水	⑯	28	土		28	土	
29	木	⑯				29	日	
30	金	⑯				30	月	
31	土	⑯				31	火	



---

## 平成26年度 人文学部 レビュー

### 1. 平成26年度振り返り

---

#### ●東京キャンパスの取組み、成果

##### ①学生募集（取組み、成果）

初年度の入学者数は、歴史学科47名（定員40名）・表現学科77名（定員60名）の計124名で定員を上回る人数を確保できた。26年度は初年度を上回る入学者の確保を目標に、募集活動に取り組むと共に、出前授業の回数・オープンキャンパス参加者の大幅増加を目指したが、実現することが出来た。

##### ②キャリア支援（取組み、成果）

出口戦略の整理、キャリア支援体制の整備、基礎学力向上策の検討・実施などを具体的目標に掲げ、一年間取り組んできたが、概ね目標を達成することが出来た。

##### ③正課外活動（取組み、成果）

本学部では正課外活動としてフィールドワークを重視し、表現学科ではNHK放送博物館・日本近代文学館・東京国際ブックフェア、歴史学科では常楽院（板橋区前野町）・板橋区立公文書館・東京都埋蔵文化財センター・川越市で実施した。学生に対して事前学習・事後学習を徹底的に行なわせ、その成果を発表させ、掲示物を学内で展示した。

##### ④その他

- ・6月に体育祭を計画していたが、実施予定の土曜日、予備日の日曜日ともに雨のため、中止となった。
- ・淑徳祭では一年生だけのためゼミ発表を行なうことが出来ず、サークルの発表だけであったため、短期大学部に比べて若干内容が見劣りした。

### 2. 次年度への課題、方策

---

- ・本学部では一年生と二年生だけなので、上級生からの助言が得られないので、履修・学習・就業指導については、教職員の指導が必要になってくる。
- ・二年続きで募集定員の確保が出来たが、次年度も積極的な募集活動を行なって、定員確保を図らなければならない。そのためには教職員一丸となって、オープンキャンパス・出前授業などに取り組むことが課題となってくる。
- ・キャリア支援の充実を図るために、教職試験対策・キャリアアワーなどの講座を設けて、早い段階から就職に対する意識付けを行なう。

## 1 学生の受け入れ①〔募集・入試〕

関連委員会	募集・入試委員会
関連部署	東京アドミッションセンター
関連データ	

## 1 平成26年度 活動方針・目標

## ACTION PLAN

## (1) 方針

東京アドミッションセンターとして、設置2年目となる人文学部の入学定員の確保と適切な入学試験の実施に努める。

## (2) 目的

- ① 人文学部の入学定員を確保するために、出願者・オープンキャンパス参加者数の目標値を以下のように設定し、実現を目指す。

## 【目標値】

学科	入学定員	出願者	OC参加者
歴史学科	40	320	700
表現学科	60	480	

- ② 受験生に対して人文学部の「アドミッションポリシー」を十分に理解してもらい、入学後のミスマッチを防ぐ。また、学修目的を明確にもった受験生を増やす。
- ③ 入試試験方式ごとに厳正な試験を実施し、受験生はもとより高等学校にも十分理解してもらう。

## 2 具体的計画

## PLAN

## 1. 入学定員の確保

歴史学科40名、表現学科60名、学部定員100名の確保。併せて学力レベルの高い受験者層の獲得を図り、学部の偏差値を上げる。

## 2. オープンキャンパスの適切な運営と実施内容の充実

オープンキャンパスでは盛況感を出すために、短期大学部と同日開催とする。来校者が混乱することの無いよう、必要な情報を収集できる導線づくりを徹底する。また、専任教員による体験型の模擬授業の充実を図り、学部・学科・コースの学びの内容を理解してもらう。

## 3. 募集効果のある広報媒体の模索と実施

適切な業者選定と有効な広告費の支出を行う。広報時期、媒体の種類、対象等を考慮しながら、大学側がその都度与えたい情報がその対象者に届くよう考慮しながら展開をする。また、単年度の募集効果を見込むものだけでなく、次年度につながる広報展開も視野に入れる。

## 4. 適切な入試運営

危機管理体制を明確にし、円滑な入学試験実施体制を構築する。

## 3 取組状況

## DO

取組状況は下記の通りとなっており、具体的には定員確保は昨年と同様に達成をした。しかしながら、目標の出願者数には届かず、一般入試・センター利用入試の出願者の減少が大きく影響した。

【目標値】

学科	入学定員	出願者	OC参加者
歴史学科	40	299	764
表現学科	60	311	

一方で、ベネッセの模試の結果では、偏差値が50となり一定の実績が見込めた。

## 4 点検・評価

CHECK

### 1. 入試

- ① 歴史学科における一般入試、センター利用入試出願者の減少の要因は、昨年度の高倍率をみた受験生が多く、偏差値・学力レベルの高い受験生が多く出願したと分析する。その為、本学合格者の多くが実績校（他大学）に合格し手続をしたと考えられる。
- ② 表現学科における一般入試・センター利用入試出願者の大幅な減少の要因は、歴史学科と同様に昨年度の志願者倍率が大きく影響したと考えられる。しかし、下記の表の通り合格者の歩留率が向上したことから、併願者の割合が大幅に減少し本学科を第一志望とする受験者が増加したことがわかる。

	一般			センター利用		
	年度	手続／合格	歩留率	年度	手続／合格	歩留率
歴史学科	H26	12／33	36%	H26	2／12	16%
	H27	16／53	30%	H27	1／46	2%

	一般			センター利用		
	年度	手続／合格	歩留率	年度	手続／合格	歩留率
表現学科	H26	2／24	8%	H26	1／15	6%
	H27	18／40	45%	H27	4／28	14%

## 5 次年度に向けた課題

ACTION

一般入試・センター利用入試において、歴史学科、表現学科ともに志願者倍率を3.0倍まで上げる。また、今まで以上に学力レベルの高い受験層を増やす。(偏差値50以上)

## 1 学生の受け入れ②〔在籍管理〕

関連委員会	教学委員会
関連部署	学生支援部
関連データ	

## 1 平成26年度 活動方針・目標

## ACTION PLAN

## (1) 方針

アドバイザーが、学生一人ひとりの必要に応じた相談や指導を行うことで、修学意欲の低下を防止し退学者を出さないようにする。さらに、学生支援部と学生に関する情報を共有化し指導を強化する。

## (2) 目標

少人数の特性を活かし、細やかな学生指導を実施する。

## 2 具体的計画

## PLAN

学期初めに欠席回数を調査し、欠席の多い学生に面接指導する。  
GPA制度に基づいた学習指導を実施する。  
学科内において情報の共有化を図る。

## 3 取組状況

## DO

各学期初め（4週目）に開講する全科目の欠席状況調査を行った。  
欠席が多い学生には、アドバイザー面接を実施した。

## 4 点検・評価

## CHECK

平成26年度入学生の退学者は表現学科2名、歴史学科0名であった。  
退学者2名は修学意欲の喪失であった。退学に至った原因を検証し、今後、このような学生にどのように指導していくかを検討し、教員間で指導方法等を共有化する。

## 5 次年度に向けた課題

## ACTION

平成26年度に開設した学部の為、新入生124名でスタートした。在学生在が他の学部より少ない為、きめ細やかな学生指導が展開できたと考えている。  
開設2年目となるので、在学生在数も倍になる。初年度と同様にアドバイザー（1クラスに2名を配置）を中心に学生指導を行い退学者0を目指す。

## 2 教育課程①〔歴史学科〕

関連委員会	歴史学科・教学委員会
関連部署	学生支援部
関連データ	

## 1 平成26年度 活動方針・目標

## ACTION PLAN

## (1) 方針

専門分野における基礎的な知識を体系的に理解させるために、歴史学を構成している主要分野に関する基礎的な知識の修得を重視する。同時に、各専門分野に結び付く幅広い内容や専門性の修得に加えて、理論的知識や能力を実務に応用する能力の修得といった観点を踏まえた編成とする。

## (2) 目標

知的活動でも職業生活や社会生活でも必要となる汎用的技能及び社会の一員として求められる態度や志向性、人類の文化、社会と自然に関する知識を修得させる。また、歴史学の学問体系の理解の基に、歴史学分野に関する基本的な知識を体系的に理解した上で、歴史学の理論と方法の関係について理解し、これらを総合的に実践する応用能力を修得させる。

## 2 具体的計画

## PLAN

- ① アクティブラーニングの効果的な活用方法を学科内で検討し、学生が積極的に参加できる環境を整える。
- ② 各科目において学生にとって魅力的なフィールドワークのプログラムを開発する。
- ③ 事前事後学習について学生の理解度に応じて適切な課題を提示し、適宜レポートを提出させるなど効果的な指導方法を考える。
- ④ ステップアップ学習にシラバスの内容が適合しているか、絶えず学科内で検討し、関連する授業科目、接続する授業科目について担当教員間で協議を加え改善に努める。

## 3 取組状況

## DO

- ① 学科会議において、個々の教員がアクティブラーニングを導入した実践内容について報告し、教員間でディスカッションを行った。
- ② 歴史学科では、26年度には5回のフィールドワークを実施した。その対象地は、板橋区前野町の常楽院、川越市立博物館、板橋区公文書館、板橋区立郷土資料館、東京都埋蔵文化財センターである。このうち、常楽院と川越市立博物館については、特定の科目の担当教員だけでなく、学科教員全員で担当し、事前の打ち合わせや下見を入念に行った。
- ③ 5回のフィールドワーク実施に際し、学生に事前学習・事後学習を課し、実施後にはグループごとに研究発表を実施して、その成果を模造紙などに貼り展示した。
- ④ 学科長の主導のもと、歴史調査法・歴史比較法・歴史研究法など複数の教員で担当する科目について到達目標、評価方法等のすりあわせを行った。

## 4 点検・評価

## CHECK

- ① 個々の教員はアクティブラーニングの導入に前向きであり、教授法についてもそれぞれ工夫が見られる。引き続き双方向の授業を行うべきである。課題提出については、教員間で若干の違いがあるようであり、学生間で話題になることもあるので、引き続き教員間の綿密な打ち合わせが必要とされよう。
- ② 歴史学科のフィールドワークは、個々の教員が授業内で実施するものとクラスアワーなど課外授業の場において教員全体で取り組んだものがある。フィールドワークを個々の教員に完

全に委ねるのではなく、時には共同で実施することにより、教員間の情報交換がなされノウハウが蓄積されただけではなく、歴史学科のフィールドワークに対する共通認識が生まれたことは大きな収穫であった。

## 5 次年度に向けた課題

## *ACTION*

- ① 歴史学科がアクティブラーニングの一環として取り組んできたフィールドワークを、より組織的に深化拡充していくために、振り返りの意味を込めて、実践内容をまとめ分析を加えた論文を作成し、高等教育研究開発センターの年報に発表し、内外に問う必要がある。
- ② フィールドワークを教員主体で運営してきたが、次年度からは学生が主体的に取り組むことができるような態勢作りを行う必要がある。

## 2 教育課程②〔表現学科〕

関連委員会	表現学科・教学委員会
関連部署	学生支援部
関連データ	

## 1 平成26年度 活動方針・目標

## ACTION PLAN

## (1) 方針

- 1) 変化の激しい時代を生き抜くためには、自分の考えを持ち、自分の言葉で伝え、周りを巻き込みながら実行する力が欠かせない。この中核となる「伝える力」こそ、生きる力になる。表現学科は「伝える力」を育むことを教育の柱とし、その教育の体系化に取り組む。特に26年度においては、導入教育の開発に力を注ぐ。
- 2) 現代社会を映す表現分野は、映像、音声を駆使する放送分野、文章ならびにビジュアル表現を編集する出版分野、小説、脚本など多彩な文章表現で勝負する文芸分野などに分かれる。さらにはあらゆる分野がデジタル化の波を受けて、大きな変化を遂げつつある。こうした時代の流れを捉えた最先端の表現手法を教育に取り込み、社会で役立つ「実学」を教える。同時に、時代の変化を超える普遍的な表現力も醸成する。その新たな教育手法を開発する。

## (2) 目的

- 1) 学生の「伝える力」を育み、社会で活躍できる人材を育てる。
- 2) 放送、編集、文芸の表現分野における実践的な表現力を育むことで、あらゆる分野で応用できる表現力を身につけた人材を育てる。

## 2 具体的計画

## PLAN

- ① 一年次の導入教育として、「演劇」と「文章表現」を徹底的に学ぶことで、表現の基礎力を身につける。
- ② すべての表現の基礎となる一般教養の重要性に気づかせ、教養と専門課程のひも付けを行う。
- ③ 授業内に、第一線に立つ現役の表現者を招くことで、表現の真髄を伝えると同時に、そのためにどんな学びが必要かを気づかせる。また学外授業も取り入れ、体験を通しての気づきを促す。

## 3 取組状況

## DO

- ① 演劇の演習授業を、1年前期、後期通して、週2コマ行った。前期終了時、後期終了時にそれぞれ成果発表の場を設けた。特に後期は、アリーナにて他学部や短大の先生方、また父兄も招いての大規模な発表会を実施した。文章表現もまた、通年で週2コマの演習型授業を行い、エッセイ集などさまざまな成果物をまとめた。
- ② すべての表現において、一般教養が不可欠であると折に触れて学生に意識付けを行った。また一般教養科目の情報処理で学んだ技術を用いてのレポート提出、また一般課程にも発表の場を多く取り入れるなど、一般教養と専門課程の関連付けに留意した。
- ③ 専門課程の導入教育である「表現文化入門」で、エッセイスト、脚本家、作家、テレビプロデューサーなど第一線で活躍する客員教授をゲスト講師に招いた。また学外授業で、東京国際ブックフェア、日本近代文学館、放送博物館、宣伝会議本社などを訪問した。

## 4 点検・評価

## CHECK

- ① 演劇の授業においては、協働作業の難しさ、大切さへの気づきを促すことができた。他者の意見を尊重する、それぞれの個性を尊重する大切さを学んだという感想が、多くの学生から聞かれた。実際に発表までのプロセス、および発表会を見るに、学生のそうした成長ぶりが

窺えた。また発表会に向けて計画的に物事を進める、あるいは出演者の病欠など想定外の事態に対応するといったプロジェクト推進力においても、成長がみられた。

文章表現の創作の授業においては、期限までに小説やエッセイといった課題のテーマで創作物を仕上げるといったプレッシャーのなかで、一つの成果物を仕上げる力が育まれた。

- ② 一年次における学びの核となる一般教養については、自分が専門的に学びたい分野との関連が分からないという学生からの声が度々聞かれた。様々な場で説いたものの、狭い視野から抜け出せない学生も一部見られた。
- ③ 表現の現場で活躍する客員教授による授業、また学外授業では、学びの姿勢が能動的な学生にとっては学習効果が極めて高く、一方何をどう学べばいいか分からない受け身の学生にとっては学びが少なかったようだ。一部の学生からは、移動や交通費の負担を指摘する声も聞かれた。学生の学ぶ姿勢や学習意欲に差があるなか、すべての学生にとっての学びにつながるよう、事前学習、事後学習をしっかりと行う必要があることを再確認した。

## 5 次年度に向けた課題

## ACTION

- ① 演劇やグループワーク、学外授業など、アクティブラーニングや協働学習を積極的に取り入れるものの、学生の学習意欲によって学びの差が大きい。主体的な学びを引き出すためのルーブリックの活用、事前・事後学習の徹底を図りたい。
- ② 社会に出て活躍できる人材を育成するため、基礎学力の引き上げに、引き続き取り組む。
- ③ 一般教養と専門課程の知識の関連について、折に触れて語りかけると同時に、授業で体感できるような関連づけに取り組みたい。

## 3 教育組織①〔歴史学科〕

関連委員会	教学委員会
関連部署	学生支援部
関連データ	

## 1 平成26年度 活動方針・目標

## ACTION PLAN

## (1) 方針

対象とする領域の授業科目数や単位数に応じて、各専門分野における教育上、研究上又は実務上の優れた知識、能力及び実績を有する教員を配置する。

## (2) 目標

日本史専攻と東洋史専攻の学問分野の教育研究水準の維持向上に資するために日本史・東洋史及びそれらの分野と関連が深い隣接分野の教員を配置する。

## 2 具体的計画

## PLAN

- ① 複数の教員で担当する授業科目について適切な配置がなされているか学科内で検討する。
- ② 専門分野に応じた教員の適切な配置がなされているか学科内で検討する。

## 3 取組状況

## DO

- ① 東洋史専攻の教員が一人であるため、負担過重になっているという状況を学科内で把握した。
- ② 複数の教員で担当する歴史調査実習Ⅰ・Ⅱについて、AクラスとBクラスが共に同じ条件で受講できるように、2名の教員がⅠとⅡをそれぞれ担当する態勢から、Ⅰ・Ⅱを併せて4人で担当するという態勢に変更した。

## 4 点検・評価

## CHECK

- ① 歴史学科が日本史コースと東洋史コースという二つの専攻分野を有しているにも関わらず、東洋史コースの専任教員が1名しかいないという状況は学生に対する充実した教育、教育の質保証という観点から問題がある。
- ② 学生の中には、近代史や文化史や美術史、考古学に関心を持ち、卒業論文ではそのようなテーマに取り組みたいと望んでいる者が少なくない。現状では、個々の教員が本来の専門分野の他に、このような分野の指導を行っているのが現実である。他の大学においては、こうした分野の教員が揃っているが、本学の場合、教員の専門分野に偏りが見られる。

## 5 次年度に向けた課題

## ACTION

- ① 学生の修学意欲などを踏まえ、専任教員で対応できない分野を兼任講師の教員でカバーする必要がある。そのためには専任教員と兼任講師との綿密な打ち合わせが必要であり、学科長の一層のマネジメント能力の向上が求められる。
- ② 歴史学科の教育体系を絶えず見直しながら、中長期的視点に立って、完成年度以降に補充すべき分野の教員配置について検討を開始する必要がある。

## 3 教育組織②〔表現学科〕

関連委員会	教学委員会
関連部署	学生支援部
関連データ	

## 1 平成26年度 活動方針・目標

## ACTION PLAN

## (1) 方針

- 1) 表現分野における教育手法、アクティブラーニングを取り入れた効果的な学びの手法を開発しつつ、教員間で共有する。
- 2) 教員間で情報共有をしながら、学生ひとり一人に対して少人数制ならではのきめ細かな指導を行う。
- 3) 26年度から始まった新学部、新学科のため、科目の担当教員がまだ固まっていない科目もある。教育の体系化を念頭に、適任の兼任講師探しを引き続き行う。

## (2) 目的

表現学科の教育方針、教育体系を専任教員、さらには兼任講師まで含めて全教員で共有することで、教育効果を上げる。

## 2 具体的計画

## PLAN

- ① 教員間で、授業の取り組みやその成果、また課題を共有する。教材についても適宜、情報共有する。
- ② 学生面談の実施など、学生ひとり一人に対してきめ細かな指導を行う。
- ③ 担当教員が未定の科目については、教員のネットワーク、また公募サイトなどを活用して選定にあたる。

## 3 取組状況

## DO

- ① 専任教員については学科会を中心に、また兼任講師については全教員会で情報共有、議論を行った。学生のレベルを踏まえての効果的な手法について、意見交換を行った。
- ② クラス担任を軸に、学生相談・面談を随時行い、細やかな指導を行った。出欠に関しては前期・後期の半ばで状況を把握し、個別指導を行った。またGPAの低い学生に対しては、個別に学習方法の助言も行った。
- ③ 表現の専門科目については、専任教員の人脈を駆使しての講師探しを行い、一般教養科目や国語・言語関連の科目については、公募サイトなどを利用して選定にあたった。

## 4 点検・評価

## CHECK

- ① 各教員がよりよい教育手法を試行錯誤しながらも、一定の情報共有、ノウハウ共有は達成できた。しかしながら、一部において授業の題材・テーマなどで重複もあり、調整が必要である。
- ② 初年度、1年次生しかいないため、一人ひとりに目配りをしながらの指導を行うことができた。
- ③ 立ち上がったばかりの学科のため、教員選定の基準がまだ明確でないこともあり、選考が難航することもあった。

## 5 次年度に向けた課題

## ACTION

- ① 表現力の向上、その基盤となる日本語能力の底上げのために、担当科目を超えて連携して指導を行う必要がある。そのための連携を図る。
- ② 表現学科ならではのアクティブラーニングをさらに開発して、教員間での情報共有を図る。
- ③ 一期生、二期生と学生数が増えるなかで、細やかな学生指導に割ける時間が限られてくる。

学生の出欠状況を随時確認するなど、情報データベースも活用しながら、より効果的な指導法を探る。問題の芽を早めに摘む方法を探っていく。

- ④ 担当教員の決まっていない専門科目について、適任の教員を探すことが喫緊の課題である。計画的に、早めの選考を心がける。

## 4 学生支援

関連委員会	教学委員会
関連部署	学生支援部
関連データ	

## 1 平成26年度 活動方針・目標

## ACTION PLAN

## (1) 方針

学生が健全で有意義な学生生活を送れるよう、学習の推奨及び学生生活の支援を行う。

## (2) 目標

短期大学部に蓄積している学生支援の知見をいかしながら、人文学部の教育目標に鑑みた学生支援体制を整える。

## 2 具体的計画

## PLAN

## (1) 入学前教育の実施

## (2) 奨学金給付者の適正な選考

## (3) サークル、学生諸団体の活動支援

## (4) SNS利用・サイバー犯罪対策に関する指導

## (5) 淑徳祭の運営実施の支援

## 3 取組状況

## DO

## (1) 入学前教育の実施について

- ・合格者向けの入学前教育として、課題図書感想文提出、新聞ノート作成を実施。
- ・入学前ガイダンスのほか、短期大学部と合同で1泊2日の新入生セミナーを実施。

## (2) 奨学金給付者の適正な選考について

- ・各奨学金給付者は、GPA、経済的状況等を基に、学部長、学科長、教学委員会によって選考を行った。

(内訳)

淑徳大学一般給付金 6名(歴史学科4名、表現学科2名)

淑徳大学貸与奨学金 0名(歴史学科0名、表現学科0名)

## (3) サークル、学生諸団体の活動支援について

- ・学生向けにサークル立ち上げ時の助言と支援を行った。

(登録サークル数) 17団体(2015年3月現在)

## (4) SNS利用・サイバー犯罪対策に関する指導について

- ・5月29日に警察庁サイバー犯罪対策課の方を招いて警察勉強会を実施。

## (5) 淑徳祭の運営実施の支援について

- ・短期大学部との合同開催で実施。淑徳祭実行委員を集い、短期大学部の学生と共同で運営を行った。学生は5クラス全員がクラスごとの企画に参加した。そのうち、表現学科Bクラスのお化け屋敷は学生の撮りおろし映像を使った演出やポスター制作などに学科らしさが感じられる催しとなっていた。サークルも6団体が参加し、日頃の成果をアピールしていた。

## 4 点検・評価

## CHECK

## (1) 入学前教育の実施について

- ・新聞ノートの回収及び学生へのフィードバック方法について、事前に具体的な進め方を決めていなかった。次年度からは、クラスアワーの担当教員がクラスアワーの中で回収及びフィードバックを行うこととした。新聞を読むことの推進とともに初年次の教育と連動していく

- ことが望まれる。
- (2) 奨学金給付者の適正な選考について
- ・選考においてとくに問題なし。
- (3) サークル、学生諸団体の活動支援について
- ・学部開設の初年度から多くのサークルが立ち上がり、学生も活発に活動していた。
  - ・東京キャンパスは運動施設や設備に限られるため、一部の学生は他キャンパスの部活動等に参加している場合もある。
  - ・サークルの活動スペースが限られており、現在はフリースペースや編集室（PCを設置）を使用している場合が多い。人文学部の完成年度までにはこれらのスペースが授業で埋まる時間が多くなるため、活動時間の調整が必要になると考えられる。
- (4) SNS利用・サイバー犯罪対策に関する指導について
- ・警察勉強会は、学生がインターネットやSNSの利用におけるリスクをあらためて理解する有意義な機会となった。
  - ・次年度からは、全学で整備された「ソーシャル・ネットワーキング・サービスの利用に関するガイドライン」に準拠し、1年生向けのガイダンス及び情報の授業科目の中における資料等で学生指導をしていく。
- (5) 淑徳祭の運営実施の支援について
- ・学部開設の初年度であったため、学生の実行委員の経験不足、短期大学部との連携が十分になされなかった。また、人文学部の出し物などについてのPR不足で、人文学部の存在を内外に十分に周知できなかった。初年度の反省点を踏まえて、今後淑徳祭の運営ノウハウを蓄積し、人文学部の特色をいかした内容にしていきたい。

## 5 次年度に向けた課題

## ACTION

人文学部の完成年度までに毎年段階的に在籍学生数が増加するため、東京キャンパス全体で計画的に学生支援体制を整えていく。

## 5 就業支援

関連委員会	キャリア支援委員会
関連部署	キャリア支援室
関連データ	

## 1 平成26年度 活動方針・目標

## ACTION PLAN

## (1) 方針

- ① 社会人基礎力の養成を目的に、積極的な就職支援を行う。
- ② 少人数指導ができるメリットを生かし、学生一人ひとりの個性を尊重しながら、学生が納得感をもったキャリア選択ができるよう支援する。

## (2) 目標

各学科の就職先イメージを具体化し、就職率を高めるための段階的なキャリア教育とキャリア支援の体制を整える。

## 2 具体的計画

## PLAN

開設初年度にあたり、歴史学科、表現学科のそれぞれの就職先や就職活動を見据え、1年次生から取り組むべき内容、2年次生以降の支援の方向性等を整理。

- (1) 高い就職率を目指すための出口戦略（全体像）の整理
- (2) 出口に応じた支援内容の整理とキャリア支援体制の整備
- (3) 就職試験を前提とした基礎学力向上策の検討・実施
- (4) 学生が業界や仕事内容について理解を深める機会の提供
- (5) 一人ひとりの志向、適性に応じた学生指導

## 3 取組状況

## DO

- (1) 高い就職率を目指すための出口戦略（全体像）の整理
  - ・歴史学科、表現学科それぞれの出口を分類し、それぞれの支援のポイントを整理。
  - ・キャリア支援の大前提となる方針として、キャリア支援室、専任教員間で共有。
- (2) 出口に応じた支援内容の整理とキャリア支援体制の整備
  - ・(1)をもとに、キャリア支援室で取り組むこと、学部共通で取り組むこと、学科として取り組むこと、個々の専任教員で対応することを整理。
  - ・キャリア支援室では、おもに一般就職試験の対策を前提に、1年次生からの意識づけとしてキャリアガイダンスの開催を決定。12月から3月まで計4回実施。
  - ・次年度から2年次生の土曜をキャリアアワーとして設定することとし、「仕事理解」と「自己理解」の両輪で年間を通じたカリキュラムを組むことにした。
- (3) 就職試験を前提とした基礎学力向上策の検討・実施
  - ・12月から実施したキャリアガイダンスでは全員対象で一般常識型の簡易試験を繰り返し実施。就職活動にむけて早期から学習することの動機を促した。
  - ・学部全員対象で「日本語検定」の受験を推進・指導。（3級ないし2級）
  - ・歴史学科では、就職試験対策の課外授業を毎週実施。
  - ・有志対象で、資格セミナー、一般常識型とは異なるSPI試験受験対策講座を開催。
- (4) 学生が業界や仕事内容について理解を深める機会の提供
  - ・1年次生から段階的に仕事理解や業界理解を促す目的で、学生が本物に触れる機会を多く設定し、各分野の実学教育を深めると同時に、キャリア教育につなげた。

（歴史学科）さまざまな史跡を巡るフィールドワーク、実物の教育資料に触れることのできる唐澤博物館の見学、子どもや地域の方とともに行う就農体験などを、通常授業や課外活動の中

で実施した。

(表現学科) 表現の第一線で活躍する客員教授やゲスト講師が教壇に立ち、具体的な仕事内容、現場で求められる人材像、仕事に臨む姿勢などについて講演した。また、1500社以上が出展し業界の最新動向が体感できる東京国際ブックフェアを見学した。

(5) 一人ひとりの志向や適性に対応した学生指導

- ・学生の進路希望についてヒアリングやアンケートを実施。
- ・クラス担当教員による面談を行い、進路や学習に関する助言を適宜実施。

## 4 点検・評価

## CHECK

(1) 高い就職率を目指すための出口戦略(全体像)の整理

- ・歴史学科と表現学科とで共通の枠組みで出口戦略を整理したことによって、キャリア支援室と学部全体で取り組むことがより明確になった。
- ・描いた出口戦略をもとに高い就職率を実現するためには、今後、学生の適性或基礎能力をきめ細かく対照しながら指導していくことが不可欠である。

(2) 出口に応じた支援内容の整理とキャリア支援体制の整備

- ・1年生からの段階的なキャリア支援がスタートできたが、キャリアガイダンスについては試験期間から春休みにかけての実施となったこともあり、一部の設定日では参加率が低かった。次年度以降は、早期に年間計画を立てたうえで学生向けに早めにアナウンスするとともに、出席の動機づけをしていくことが求められる。

(3) 就職試験を前提とした基礎学力向上策の検討・実施

- ・一般常識型試験の結果で、全体的な基礎学力不足が指摘された。早いうちに対策に取り組むことを学生に動機づけていくことが必要である。
- ・日本語検定もこの基礎学力向上に連動するので、引続き受験を奨励していく。

(4) 学生が業界や仕事内容について理解を深める機会の提供

- ・学部、学科の特色としても、キャリア教育の一環としても、ひじょうに重要な取り組みである。2年次生以降は、より出口戦略に連動した内容が求められる。

(5) 一人ひとりの志向、適性に応じた学生指導

- ・少人数教育で専任教員と学生の距離が近く、各学生の志向や適性を1年次生のときから把握し、適切な助言できるメリットがある。
- ・初年度は1年次生のみきめ細かく対応できた面もあるので、今後、完成年度までの間に学生指導のノウハウを蓄積し、現体制のままでも対応の質を確保できる体制を整えていくことが必要である。

## 5 次年度に向けた課題

## ACTION

- ① 内外からの情報を収集し、必要に応じて効果的な戦略を追加・調整していく。
- ② キャリア支援室と教員が連携し、情報を共有しながら就業支援を進めていく体制を整える。
- ③ 歴史学科・表現学科それぞれの学科において、専門性を活かした職業への採用への方策を探る。

## 6 研究活動

関連委員会	自己点検評価委員会
関連部署	総務部、教育研究支援センター
関連データ	

## 1 平成26年度 活動方針・目標

## ACTION PLAN

## (1) 方針

- ① 研究成果に裏打ちされた教育活動を行うために、個々の教員が研究目標を明確にし研究業績を蓄積する。
- ② 外部資金獲得を念頭に置いた研究活動を推進できるような意識改革のための態勢作りを調える。

## (2) 目標

- ① それぞれの専門分野に関わる著作論文を発表したり、学会研究会等での報告により研究業績を蓄積する。
- ② 大学学術研究助成・学術奨励研究助成・科学研究費などに積極的に応募する。

## 2 具体的計画

## PLAN

- ① 学科会議において定期的に個々の教員による研究の中間報告会を実施する。
- ② 学科長と個々の教員の面談により、研究状況の把握に努める。

## 3 取組状況

## DO

- ① 科学研究費については新規2件が採択された。
- ② 学科会における個々の教員の研究の中間報告を実施し、博士号未取得者の研究支援を行った。
- ③ 教育研究支援センターの支援のもと、7名の教員のうち6名が科学研究費公募に対し応募を行った。
- ④ 学術専門書（森田喜久男教授『古代王権と出雲』同成社）が刊行された。
- ⑤ 科学研究費基盤研究（C）『東南アジアにおける出土銭貨の考古学的研究』（研究代表者三宅俊彦教授）の研究会を東京キャンパスで開催した。
- ⑥ 遠藤ゆり子准教授が、博士論文の出版助成申請を行った。

## 4 点検・評価

## CHECK

- ① 個々の教員は確実に研究業績を積み重ねているが、博士号未取得者が見られる。
- ② 科学研究費公募のような外部資金獲得のための申請は、学科教員全員で行う必要がある。

## 5 次年度に向けた課題

## ACTION

- ① 引き続き博士号未取得者に対する学位請求論文執筆のための支援を行う。
- ② 学費を始めたとする外部資金調達、及び各種研究助成金の公募に積極的に応募することを学科会などの場において奨励していく。
- ③ 学科会など学科教員が一堂に会する場において研究発表等を積極的に行う機会を設ける。
- ④ 学会や研究会において教員が積極的に発表できるような環境作りのためのマネージメントを学科長は行う必要がある。

## 7 社会貢献

関連委員会	ボランティアセンター
関連部署	総務部
関連データ	

## 1 平成26年度 活動方針・目標

## ACTION PLAN

## (1) 方針

大学と包括連携協定を結んでいる板橋区の教育委員会や生涯学習施設、さらには郷土史の研究会と連携し、歴史を活かした地域作りの一端を担う。

## (2) 目標

関係諸機関との連携し、教育研究活動を通して地域の歴史文化を再発見し地域を活性化させる。

## 2 具体的計画

## PLAN

- ① 板橋区教育委員会生涯学習課、板橋区立郷土資料館と協議し、地域の文化財を活かした教育研究活動を推進する。
- ② 東京キャンパス近隣の小学校と協議を重ね、学生が地域活動に参加し実践を通して学ぶ機会を設ける。

## 3 取組状況

## DO

- ① 板橋区教育委員会生涯学習課文化財係との協議により、板橋区内の個人宅で所有されている考古学資料のコレクションの寄託を受け、歴史学科として資料の整理を行った。
- ② 教職課程の授業の関わりで、板橋区赤塚支所都市農業係と連携した歴史学科学生による「農業体験」を実施した。また上板橋小学校、前野小学校、常盤台小学校と連携する形で、歴史学科の学生を学習支援ボランティアとして派遣した。

## 4 点検・評価

## CHECK

- ① 上記取組状況で言及した「農業体験」や学習支援ボランティアについては、担当教員の土井進教授の編集により、『学生の主体的な地域連携活動「淑徳大Together with him (共生)」』と題する報告書としてまとめられた。これは特筆すべきことではあるが、このような地域連携活動を行った結果、どのような成果があったのか、それが教職課程の教育にどのような意義があるのか、こういった点についてさらなる考察が求められる。
- ② 板橋区と連携した地域貢献活動は、始まったばかりであるが、情報発信のやり方に一層の工夫が望まれる。考古学資料を利用した教育研究活動の成果を地域に還元できるような仕掛け作りが必要である。

## 5 次年度に向けた課題

## ACTION

- ① 地域貢献をさらに進める。その際に貢献したという事実を羅列するだけでなく、そうすることがどのような意味で教育研究活動に資するものであったのか、この点を絶えず考えながら情報発信を行う。
- ② 地域貢献の対象を板橋区だけに限定せず、本学においていまだ連携が不十分な自治体へ積極的に進出していく。
- ③ 板橋区の文化財に関わる調査研究活動の還元の仕方について、ただ単に研究成果のみを情報発信するのではなく、地域研究の途中であっても地域住民と共にできることはないか、さまざまな可能性を探ることが必要とされる。

## 8 図書館〔東京〕

関連委員会	東京図書館運営委員会
関連部署	図書館事務室
関連データ	

## 1 平成26年度 活動方針・目標

## ACTION PLAN

## (1) 方針

- (ア) 人文学部は本年度に開学したばかりであるため、まず人文学部の学生および教員の教育・研究に資する図書、雑誌を積極的にそろえること。
- (イ) 多くの学生、教員に図書館の積極的な利用をよびかけること。具体的には図書館を使っ  
ての授業及び学生に対し21時までの開館時間を利用した授業後の利用をよびかけること。

## (2) 目標

## 2 具体的計画

## PLAN

- (ア) 学生による大学図書館の理解および利用促進のために1年次学生全員に図書館ガイダンスを行う。具体的には学問分野ごとの図書の配架状況、目的とする図書をどのように探すのかを実際に端末を用いておこなう。このほかに図書館が行っているレファレンスサービスなど種々の業務について説明を行い理解させる。
- (イ) 図書選書委員を各クラスから選び、彼らを中心に積極的に学生サイドからの購入希望図書を募集する。
- (ウ) 選書ツアーとして池袋のジュンク堂書店に学生の図書委員を引率し、その場で購入希望図書リストを出させる。

## 3 取組状況

## DO

上記の(ア) 図書館ガイダンス、(イ) 学生からの購入希望図書の募集 (ウ) 選書ツアーなどはすべて計画通り実施した。

## 4 点検・評価

## CHECK

- (ア) 人文学部の図書整備計画に従い、購入予定した図書は一部の古書を除きすべて入手できた。学部完成年度までこの作業は継続して行う。
- (イ) 図書館ガイダンスはほとんどすべての学生が受講した。ガイダンス内容は受講した学生にも好評であり、今後も継続的に1年次生に対し実施したい。また、2年次以上の学生に対し、特に学術研究論文の作成にあたっての資料の検索、入手方法など必要に応じ実施していく。
- (ウ) 各クラスから3名の図書委員が選出されているが、選ばれた図書委員の活動は必ずしも十分ではなく、その活動に対し、指導・援助できなかつた点は大いに反省せねばならない、次年度は1年次生、2年次生が在籍することより、各クラスから1名の図書委員を選出し、少数精鋭で選書ばかりでなく図書館の運営に対し学生サイドからの意見を聞いていく。
- (エ) 平成26年度の図書館利用の最大の問題点は図書館の利用者が少ないことである。具体的な数値で示せば、平成26年度授業日の入館者数は短期大学部学生を含めて1日当たり約70名(東京キャンパス在籍学生数は約800名) また人文学部学生による図書の館外貸し出し数は合計で160冊であり、1年間で学生一人当たり1.5冊しか借り出していない。  
図書館の立地する場所がふだん授業を行っている4、5号館からかなり離れており、立地上の都合で授業の合間に寄ってみるといわけにはいかないにしても、この利用者数及び館外貸し出し数はあまりに低いと言わざるを得ない。

- (1) 短期大学のみの時に比べ、人文学部の設置により図書館利用者数及び図書の貸し出し冊数が多少は増加してはいるが、まだまだ不十分であり次年度は学生の図書館利用の増加を最優先の目標として進める。

具体的には

(ア) 読書感想文発表会の開催

一定の冊数の図書を借り出し、それぞれの図書について感想文を提出した学生に淑徳祭で発表の機会を与え、表彰する。

(イ) シラバスに記載の参考図書を可能なら複数冊用意し、学生が利用しやすいように参考図書コーナーを設け、そこに一括して配架する。

(ウ) 全教員会において教員に図書館利用の推進のため、図書館での授業、特に視聴覚資料の使用時など、および参考図書について感想文を書かせるなどの配慮をおねがひする。

(エ) 図書館利用の促進の目的の一つとして、従来は主として選書作業をしていただいた図書選書委員に対し、二つのグループに分けて活動を行なってもらう。具体的には図書館の発行する「揺鈴」の編集及び読書感想文発表会の運営および学生からの図書館の中での企画展示などのアイデアを実際の活動に移す。

(オ) 学部設置後1年を経過したので、次年度は新たに購入雑誌の見直し、視聴覚教材の充実にも力を注ぐ。

(カ) 図書館から離れている4、5号館からも可能なら蔵書の検索ができるようにしていきたい。

(キ) 図書館をただ単に図書の閲覧、視聴覚教材の鑑賞の場所にとどまらず、自宅にパソコンを持たない学生に対しパソコンのみを利用しに図書館に来ることも可能であるようにしたい。

(ク) 淑徳大学の3つの図書館の連携、具体的には所蔵図書の相互貸出しなど、および各図書館の特色化を図るため、3図書館の館長会議を継続的に開催する。

## 9 自己点検・評価

関連委員会	自己点検評価委員会
関連部署	学生支援部
関連データ	

## 1 平成26年度 活動方針・目標

## ACTION PLAN

## (1) 方針

本学の大学教育における教育の理念や目標に照らし、教育活動及び研究活動の状況を点検、評価することにより、現状を正確に把握、認識すると同時に、その達成状況を評価し、評価結果に基づく改善の推進を図る。(人文学部設置の趣旨より)

## (2) 目標

- 1) 人文学部設置趣旨にある学部・学科の教育研究の目的、具体的な到達目標を教職員で共有し、設置趣旨に沿った人材を養成する。(人文学部設置の趣旨より)
- 2) 学部の教育・研究水準の向上および、管理運営の健全化のため、各学科、各委員会の規定に基づき定期的に自己点検評価委員会を開催する。(人文学部設置の趣旨より)
- 3) 自己点検・評価を自らの教育研究活動の改善のサイクルの中に明確に位置付け、自己点検・評価を行う責任体制を明確にする。(人文学部設置の趣旨より)

## 2 具体的計画

## PLAN

- 1) 4月に人文学部設置趣旨を配布する。設置趣旨に合致したシラバスで授業が展開されているか、また、研究計画がなされているか、各学科長が確認する。さらに、全学で取り組んでいるアクティブラーニング、ルーブリックなどに関する知識を深める研修会を実施する。
- 2) 教授会、学科会、委員会を定期的に開催する。
  - ・ 4月より教授会を月に一度実施する。
  - ・ 4月に各委員会を設置し、各委員・委員長の選出を行う。
  - ・ 5月より、月に一度各学科会・各委員会を実施する。
 各学科、委員会から年度末に報告書を提出させる。
- 3) 全教員が一年間の教育研究計画書の提出、また、平成25年度から全学において開始している「自己管理目標制度による教育研究活動計画書」を提出し、今年度の目標を提示する。年度末に今年度の目標の達成度を評価し、次年度の目標を立てる。

## 3 取組状況

## DO

- 1) 4月に人文学部設置趣旨などが配布された。また、研究計画書を学科長に提出、確認された後、学部長に提出された。シラバスに関しては、各学科長が全シラバスを設置趣旨に合致しているかを確認した後、公開、授業が実施された。さらに、全学で取り組んでいるアクティブラーニング、ルーブリックなどに関する知識を深め、導入するためのFD研修会が2回実施された。
- 2) 教授会、学科会、委員会を定期的に開催する。
  - ・ 4月より月に一度、また、必要な場合は適宜緊急教授会が実施された。
  - ・ 4月に各委員会を設置し、各委員・委員長の選出が行われ、5月より月に一度各学科会・各委員会が実施された。さらに、各学科、委員会から年度末に報告書が提出された。
- 3) 1名の長期療養中であった教員を除き、4月に一年間の教育研究計画書、「自己管理目標制度による教育研究活動計画書」が提出され、今年度の目標が提示された。さらに、年度末には、今年度の目標の達成度を各自が評価し、次年度の目標を立てた。

## 4 点検・評価

## CHECK

- 1) 人文学部設置趣旨にある学部・学科の教育研究の目的、具体的な到達目標を情報としては共有できたが、全員で把握する段階にとどまった。また、学科長による各シラバス確認はなされたが、問題点の抽出にまでは至らなかった。2回のFD研修により、アクティブラーニング、ルーブリックに関しては、次年度にはさらに導入する教員が増えることが期待できる。
- 2) 学部長の強いリーダーシップのもと、計画通り実施された。よって、学部の教育・研究水準の向上および、管理運営の健全化を図ることに繋がっていくであろう。
- 3) 初年度から計画通り実施し報告書を作成することで、自己点検・評価の過程を経て自らの教育研究活動の改善すべきところ、自己点検・評価を行う責任体制が明確になった。

## 5 次年度に向けた課題

## ACTION

- 1) 次年度は、学部・学科の教育研究の目的、具体的な到達目標を一人ひとりが把握する段階から、それをいかに日々の教育研究に取り入れていくかを学科、学部全体で話し合い、教育研究水準の向上および、管理運営の健全化を図ることで、学部の目指す方向性の真の意味での共有化を開始する。また、授業科目の位置付けや、他の授業科目との接続関係について、教員の相互理解を図るなど組織的な取組にする。
- 2) 次年度は、さらに内容の充実を図る。
- 3) 次年度の目標を提示し、平成27年度の目標達成に向け、一人ひとりが、PDCAの実施を開始する。

## 10 その他〔ハラスメント防止など〕

関連委員会	教育向上委員会
関連部署	学生支援部
関連データ	

## 1 平成26年度 活動方針・目標

## ACTION PLAN

## (1) 方針

淑徳大学ハラスメント防止規程に基づき、淑徳大学構成員へのハラスメントを防止し、ハラスメントのない快適な環境を保証するための活動を行う。

## (2) 目標

ハラスメントの発生を未然に防止する。

## 2 具体的計画

## PLAN

人文学部は初年度であるため、まず、教職員に対する研修会を実施し、啓発に務める。

## 3 取組状況

## DO

外部講師によるハラスメント研修を2回実施した。1回目は、「ハラスメントとは」についてのレクチャーを受けた。2回目は、実際にグループに分かれ、ディスカッションなどをしながら進めていく実践的な研修を行った。

## 4 点検・評価

## CHECK

新学部であることから、一度もハラスメント研修を受けたことのない教員もいたため、「ハラスメントとはなにか」という初歩的なことから、実践的な研修まで実施できたことは、評価できる。しかし、「教職員が学生に対するハラスメント」という視点からだけの研修であった。今後は教職員間、あるいは、学生同士などの研修も必要になるであろう。

## 5 次年度に向けた課題

## ACTION

ハラスメントは、学生間・教員間でも起こる。よって、未然に防止するための学生に対する研修・パンフレットの作成、ハラスメントが発生した場合に迅速に適切な対応が行える窓口の設置・相談員の選出などに着手する。